

## 【めめめ】

「かいじゅうには、おすめすが、ないというたが、めすのかいじゅうは、おらんのか」

ぼくはききました。

「金ちゃんは、雌の怪獣と結婚でもする気ですか」

懐爺はぼくをからかいました。

「あほぬかせ。また、うちのにわに、かいじゅうが、きよった。そいつが、どうにも、おんなくさいんじゃ」

「もしかして、全身に目玉が三つだけついている、怪獣ではありませんか。そしてその目玉は、女性の性器に見える、ということですね」

「わしのくちからは、いえん」

「【めめめ (女女女)】 ですね。あれは、金ちゃんみたいな美少年が大好きでして」

「こんなぶさいくな、びしょうねんがあるもんか」

「いえ、つまり、あの、その、【めめめ】 には、金ちゃんこそが、天下の美少年に見えるんですよ」

「なぜじゃ」

「目が三つありますから、焦点が定まりません」

「だば、かいじいも、てんかの、びろうじん、にみえるじゃろう」

「美、老人ですか。それとも尾籠、人」

「しらん」

「しらんぷりしないで。金ちゃんがききたいのは、【めめめ】 退治の話でしょう」

「かいじゅうは、ほんしつてきには、にんげんに、きがいをあたえんのじゃろ。だば、もう、ほおっておくかのう。また、うさぎのふんで、とかすのも、かわいそうじゃからのう。わしんちのにわは、これから、かいじゅうの、どうぶつえんに、するかのう。もうかるかのう」

「怪獣だって、見せ物になるのは厭なものなんです。見せたい、見せて驚かせたい、見せたくない、見せて、気味悪がられたくない。いつも、そのふたつの葛藤で、怪獣は苦しんでいるのです。【めめめ】 は、その葛藤の代表選手。性器みたいな目玉を、見せたくない、いや、ちょっと見せてみたい。やっぱり、見せるのは、いやん、ばっかーん、この助平」

「ばかで、すけばは、かいじいじゃ。かんがえすぎじゃ」

「失礼いたしました。それでは、さようなら」

腰を丸めて、祠にはいろうとする。

「まてまて、かいじいには、かんがえてもらいたいことがあるんじゃ」

「考え過ぎの爺は、失礼します」

「まてまて、わしがわるかった。すけばはともかく、ばかというほうが、ばかじゃった」

「分かってくれましたか。ひとに馬鹿とか阿呆とか、糞じじいとか惚け野郎とか、ふあつくゆーとか、いうものではありません」  
「そのさいごのやつは、なんじゃろかのう」  
「覚える必要はありません。それでは、おやすみなさい」  
「こらまで」  
「こらも、いうものではありません」  
「むむむ、いうことばが、へるのう」  
「お腹は、無意識に減っていきますが、言葉は、自分で意識的に、どんどん減らしていくものです」  
「むむむ。もう、しゃべらん」  
「それでは、これで」  
「むむむ」  
ぼくは言葉ではなく、態度で示しました。  
「痛い痛い。金ちゃんたら、馬鹿力」  
「ばかは、いうもんでない」  
「へつれいしました」  
「かいじい、へたれたじゃろ」  
「ですから、屁つれいしました」  
「かいじい、よくきけ。【めめめ】のめだまは、かいじいのおならより、くさいんじゃ。なんとかならんかのう」  
「それは当然、性器くさいですよ。おとなになれば、そのにおいに陶然とするものですが、残念ながら金ちゃんはこどもですからねえ」  
「つまり、わしが、はやくおとなになれば、いいんじゃな」  
「大人になることをお奨めはできませんね。大人になることは畢竟（ひっきょう）くさくなることですから」  
「なるほどのう。ひきょうくさく、なるんじゃな。なつとくじゃ」  
「臭い消しには、香水なんでしょうが、この村にはそんなおしゃれなものはありません。香水代わりに草花を教えましょう」  
「それじゃそれじゃ、なんじゃなんじゃ」  
「麝香草（じゃこうそう）というものですが、小山の禁（ふもと）にいけばとれます」

ぼくが小山の禁に行くと、それらしきものがたしかに生えていました。  
それをいくつか抜き取って、帰りました。  
しかし、そのときはもう、【めめめ】は消えていました。  
においだけは、幽かに残り、ぼくは麝香草を庭に植えました。  
そのときなんだか、形容しようのない淋しさに襲われて、しかたがありませんでした。  
その淋しさは、後年恋人に逃げられたときの淋しさに、よく似ていました。

